

源氏物語におけるミヤコとキヤウの相違

『言語の研究』三号
二〇一七年七月

竹部 歩 美

はじめに

現行の古語辞典では、和語の「都（みやこ）」（以下、ミヤコ）と漢語の「京（きやう）」（以下、キヤウ）とは、どちらも、「皇居のある土地」（『日本国語大辞典第二版』^{〔1〕}）や、「平安京」（池田一九六〇^{〔2〕}）のように意味記述されている。しかし、『源氏物語』の中で使用されているこの二語の間には、使用される場面やその他に相違があるようである。キヤウとミヤコに関する先行研究には、今西（一九九四）・神尾（一九八九）があり、また、ミヤコについてのみ考察する小町谷（一九八三）・廣田（一九九〇）があるものの、なお疑問の残るところがある。

そこで、本稿は『源氏物語』の中にあるミヤコとキヤウの用例を比較検討し、二語の間の用法上の相違について考察する。資料には『源氏物語大成校異篇』本文（以下、『大成』。本文の表記は私に改める。）を用い、併せて、写本影印資料の表記についても検討する。

一．先行研究と問題の所在

古語辞典類ではミヤコとキヤウの語義の相違は明確にはならな

い。また、キヤウの項目を見るとミヤコを参照するよう導かれ、そのミヤコの項目ではキヤウを参照するよう記されている場合もある。その中で、『日本国語大辞典第二版』や『角川古語大辞典』^{〔3〕}、小西（二〇一）^{〔4〕}のように、ミヤコの項目にのみ、ミヤコは「鄙」に対するものであるとの記述がなされる。

きやう「キヤウ」「京」〔名〕

〔1〕皇居のある土地。みやこ。帝都。首都。また、特に平安時代の都、すなわち京都（現京都市）をいう。（以下省略）

みやこ「都・京」〔名〕

〔みや〕は宮、「こ」は場所の意か。↓補注

〔1〕皇居のある土地。天皇が仮居した行宮（あんぐう）などという。

〔2〕政治、経済、文化などの中心として、多くの人口を有する繁華な都会。首都。首府。田舎に対していう。日本では平安時代以降、多く京都をさしている。

〔3〕何かを特徴として、何かが盛んに行なわれることで、それを中心として人の集まったりする都会。（以下省略）

補注 〔1〕「場所」を表わす「こ」は上代において乙類であり、「みやこ」の「こ」は甲類であるが、「や」の母音に引

かれて甲類に転じたとする説がある。

『日本国語大辞典第二版』（用例の引用は省略した）これらと類似の指摘に、ミヤコはミヤコ以外の地とは対比的に示されるものであるとする小町谷（一九八三）・廣田（一九九〇）がある。そして、廣田（一九九〇）は、ミヤコは「田舎、鄙などという語との対比において成り立つ」ものであり、「都はつねに優位に立つ。出自官位の高低、文化的な生活が可能かどうかなどが問われることにおいて、田舎、鄙などという語と対比されて都の語義は定まる」と指摘している。だが、例えば次の用例¹では、乳母は筑紫への下向を嘆き、キヤウへ戻ることを望んでいることから、キヤウと筑紫とを対比しているように思われる。この例から、キヤウも筑紫という「鄙に対して」いるのではないか、また、廣田（一九九〇）の指摘する「優位性」はミヤコのみならずキヤウにもあてはまるのではないかという疑義が生ずる。

1（玉鬘の乳母たち）「夕顔がおはせましかば、われらは、筑紫にはくだらざらまし。」と、京のかたを思ひやらるるに、

かへる波もうらやましく心細きに…（玉鬘、七二〇^⑭）

ミヤコについての論である小町谷（一九八三）には、キヤウについても触れるところがあり、キヤウは「単なる場所としての都を意味する」ものであるとしている。しかし、用例を示すなどとしての具体的な考察はなされてはいない。

ミヤコとキヤウの相違について論ずる今西（一九九四）は、地理的・心理的に、平安京から見て、ミヤコは遠いもの、キヤウは近いものであるとするが、今西（一九九四）でも述べられているとおり、遠近どちらとも区別のできない場合がある。また、神尾（一九八九）

は、ミヤコが「文化的空間」を表し、キヤウが「政治的空間」を表すとするが、これに対し、今西（一九九四）は、政治と文化が当時の社会では「不可分」であることを理由に、この分析は「図式的にすぎる」ものであるという見解を示している。

このように、ミヤコとキヤウに関する先行研究の考察や指摘には疑問の残るところがあり、二語の相違についてはいまだ不明確である。

二．用例数と表記

『大成』本文中には、ミヤコが45例、キヤウが87例ある（『大成』の索引篇に拠る^⑮）。『大成』本文におけるキヤウとミヤコの表記は次のとおりである。ミヤコは読みが確定できる用例が大半を占め、キヤウは漢字表記が多くを占めている。

ミヤコ—都…7例

宮…13例

みやこ…25例

キヤウ—京…85例

きやう…2例

『大成』では表記の相違は異同としては扱われないため、写本の表記を『大成』で知ることができない。そこで、『源氏物語』写本におけるミヤコ・キヤウの表記の実態と異同とをここで確認する。

本稿巻末の【表1】はミヤコの表記、【表2】はキヤウの表記について、『大成』の用例とそれに対応する20の写本・断簡（冊子として刊行され、閲覧し得るもの^⑯）をそれぞれ整理したものである。

本稿は写本の系統の検討が目的ではないため、写本の配列は本稿が写本に付与した仮の略称の五十音順とする。写本・断簡の翻刻を示すにあたっては、元の字母がわかるように記す。大成本文に対応する部分がない場合は「ナシ」、落丁や欠丁は「落丁」、欠巻は「一」、未刊行のため閲覧できないものについては空欄にしてある。

さて、【表1】からは、和語のミヤコはいずれの写本においても漢字表記されることがほとんどなく、仮名の字母は様々だが「宮こ」「みやこ」の表記が大半を占めることがわかる。一方、【表2】から、漢語のキヤウは漢字表記の場合が多いことが明らかである。キヤウを漢字「京」でしか表さない写本もあるものの、いずれかの写本において仮名書きの例がある場合が多い。

キヤウとミヤコが、語義も用法もまったく等しいものであるならば、ミヤコ・キヤウとが書写上で交代する可能性があると推測されるが、そのような例は、【表1】【表2】に網掛けを施した4例を見るにとどまる。『大成』、ならびに、加藤（二〇〇一）からは、この4例のほかに2例、異同があることを知り得るものの、⁽⁸⁾ これを含めても6例である。このことから、ミヤコとキヤウには何らかの相違があるのではないかと考えるのである。

ところで、ミヤコ45例とキヤウ87例とが現れる箇所は【表3】のようにまとめられる。なお、地の文・会話文・心内文・消息文の違いによるミヤコとキヤウの用法には相違は見られない。

【表3】から二つのことを指摘できる。

第一に、和語であるミヤコが和歌に用いられるのに対し、漢語であるキヤウにはその例がないことが挙げられる。このことは、『源氏物語』にのみあてはまることではない。平安期において和歌にキ

ヤウがよみ込まれたものには、『散木奇歌集』（一二二七年頃成立）の一五四三番歌「あやまたぬ花の都をおのれからうき京なりと身をばしるらん」を見るにとどまる。これは一五四三番歌の詞書の「ききやう（桔梗）」をキヤウの掛詞として読み込んだがために生じた稀な例であると言える。

【表3 ミヤコとキヤウの用例数】

| | ミヤコ | | | | | | キヤウ | | | | | | |
|-----|-----|----|---|----|---|----|-----|----|---|----|---|----|-------|
| | 地 | 発 | 心 | 消息 | 歌 | 計 | 地 | 発 | 心 | 消息 | 歌 | 計 | |
| 夕顔 | | | | | | 1 | 2 | | | | | 3 | I |
| 若紫 | | 2 | | | | 2 | 3 | 4 | | | | 7 | |
| 須磨 | 3 | 3 | | 2 | 4 | 12 | 5 | 1 | | | | 6 | |
| 明石 | 3 | 4 | 2 | | 1 | 10 | 8 | 1 | 1 | | | 10 | |
| 落標 | | | | | | | 1 | | 2 | | | 3 | II |
| 蓬生 | 1 | 2 | | | | 3 | 1 | | | | | 1 | |
| 関屋 | | | | | | | 2 | | | | | 2 | |
| 松風 | | 2 | | | 1 | 3 | 1 | | | | | 1 | |
| 玉鬘 | 1 | 2 | 2 | | | 5 | 6 | 4 | | | | 10 | I・III |
| 若菜上 | 1 | 1 | | | | 2 | 3 | 2 | | | | 5 | |
| 若菜下 | 1 | | | | | 1 | | | | | | | |
| 夕霧 | 1 | | | | | 1 | | | | | | | |
| 橋姫 | 1 | 1 | | | | 2 | 2 | 1 | | | | 3 | IV |
| 椎本 | 1 | | | | | 1 | | | | | | | |
| 総角 | | | 1 | | | 1 | 7 | | 2 | | | 9 | |
| 早麿 | | | | | | | | | 1 | | | 1 | |
| 宿木 | | | | | | | | 3 | | | | 3 | |
| 東屋 | | | | | | | 1 | 1 | | | | 2 | |
| 浮舟 | 1 | | | | | 1 | 4 | 5 | 2 | | | 11 | |
| 蜻蛉 | | | | | | | 4 | 1 | 1 | | | 6 | |
| 手習 | | | | | 1 | 1 | 1 | | | 1 | | 2 | |
| 夢浮橋 | | | | | | | | 2 | | | | 2 | |
| 合計 | 14 | 17 | 5 | 2 | 7 | 45 | 50 | 27 | 9 | 1 | 0 | 87 | |

第二に、ミヤコとキヤウは『源氏物語』のいずれの巻にも現れる語ではないということが挙げられる。ミヤコとキヤウが現れる巻について話題ごとに整理すると、【表3】の右に示したI～IVのよう

に区分できる。Ⅰは源氏の須磨・明石流離から帰京までに関する話題、Ⅱは玉鬘の筑紫下向から上京に関する話題、Ⅳは宇治十帖である。若菜上・下と夕霧には、明石に関する話題（Ⅰ）のほか、源氏と紫上の住吉参詣の話題、一条御息所を見舞うための夕霧の小野への訪問の話題（これらをⅢとした）とが混在する。つまり、ミヤコとキヤウが現れるⅠ～Ⅳは、いずれも、ミヤコ・キヤウ以外の土地が関わっているのである。そのため、例えば、「いと里はなれ」（須磨、三九五③）とされる須磨や、筑紫で育った玉鬘が「沈みて生ひ出でたらむ」（玉鬘、七四五⑤）とされるように、「沈」んだ土地と見なされる筑紫などのようなミヤコ・キヤウ以外の土地を、仮に、「鄙」とするならば、ミヤコのみならずキヤウもまた、明石・須磨・筑紫・宇治のような「鄙」と対立していたり対照されていたりするのではないかということが疑問となるのである。

なお、本稿では、これ以降、散文中のミヤコ38例とキヤウ87例を考察することとし、和歌中のミヤコの7例を考察対象から除外する。

三、ミヤコの範囲とキヤウの範囲

ところで、『源氏物語』におけるミヤコとキヤウが表す土地の範囲については、次のように考えられる。

ミヤコの範囲は、用例2から次のように推測できる。

2九条に、昔知れりける人の残りたりけるをとぶらひいでて、その宿りを占めおきて、都のうちと言へど、はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず、…（玉鬘、七三〇②）

用例2では、平安京内の九条が、「ミヤコのうち」であるとされ

る。^⑩用例2の「九条」は「左京の九条」であり、「はかばかしき人の住みわたる」ような所ではない「場末」^⑪であると考えられている。このことから、平安京の九条までがミヤコの範囲であると考えられる。ただし、平安京の右京は「都市としての発展をみないうちに荒廃」（『日本国語大辞典第二版』）していたことは夙に知られている。よって、ミヤコの範囲は、都市として発展していた左京に限定される可能性もある。

キヤウについては、その範囲を具体的に推測できる用例は見られないが、平安京の西側の、右京を意味する「西の京」は、次の用例3を含めて4例ある。「西の京」とは、キヤウ全体から見た西側を指すとも、あるいは、左京から見た右京を指すとも考えられる。

3この家あるじぞ、西の京の乳母のむすめなりける。

（夕顔、一四四^⑪）

これらのことから、キヤウとミヤコの表す土地の範囲は概ね一致しており、平安京全体、あるいは、平安京の左京のみであると推測できる。

このように考えたとき、次の用例4の傍線部「この近き都の四十寺」^⑫に対する註釈書類の解釈に疑義が生ずる。註釈書類では「京都近辺の四十の寺」^⑬と現代語訳を施している。「この近くの京都の四十の寺」と現代語訳する『新編日本古典文学全集』^⑭がこの箇所について「京都付近の四十か所の御寺」と頭注を施すことから、いずれの註釈書類も「近き都」を「京都近辺」と解釈しているものと考えられる。しかし、ミヤコが表す範囲が平安京あるいは左京であるとすると、用例4の「（近き）ミヤコ」を「京都（近辺）」のような広範囲とするのは適切ではないと考える。

4 (内裏に在中宮は) 今年の残りの御祈りに、奈良の京の七
大寺に御誦經、布四千反、この近き都の四十寺に、絹四百疋
を分ちてせさせたまふ。(若菜上、一〇八二⁽¹⁴⁾)

なお、「奈良のキヤウ」であり「この近き」ミヤコ⁽¹⁷⁾であるのは、
奈良はかつて内裏のあった地であって現在は帝がおらず、京都は物
語の時点で内裏がある土地であって帝がいる—ミヤコの語源である
「宮」がいる「処」——という相違に基づくものと考えられる。

四. ミヤコとキヤウに下接する助詞の相違

ミヤコとキヤウの相違点としては、まず、下接する助詞の相違が
挙げられる。二語に下接する語を一覧にしたのが【表4】であるが、
キヤウには格助詞ヨリ・格助詞へ・副助詞マデが下接するのに対し、
ミヤコにはその例がないのである。

さて、キヤウには起点を表す格助詞ヨリが下接する用例があるが、
ミヤコに格助詞ヨリが下接する
用例は『大成』本文になく、写
本間の異もない。

5 この常にゆかしがりたま
ふものの音など、さらに
聞かせてまつらざりつ
るを、いみじう恨みたま
ふ。(源氏)「さらば、か
たみにも忍ぶばかりのひ
とことをだに。」とのた

【表4 二語に下接する助詞】

| | ミヤコ | キヤウ |
|------------|-----|-----|
| ニ・ニテ (格助詞) | 12 | 37 |
| ノ (格助詞) | 17 | 26 |
| ヘ (格助詞) | | 7 |
| ヨリ (格助詞) | | 11 |
| ヲ (格助詞) | 4 | 2 |
| ハ (係助詞) | 1 | 1 |
| マデ (副助詞) | | 1 |
| 非表出ニ (格助詞) | 1 | |
| 非表出ヲ (格助詞) | 3 | 2 |
| 計 | 38 | 87 |

まひて、京より持ておはしたりし琴の御琴取りにつかはして、
心ことなる調べをほのかにかき鳴らしたまへる、深き夜の澄
めるはたとへむかたなし。(明石、四七一⁽¹⁾)

6 京より、母の御文もて来たり。(浮舟、一九二四⁽²⁾)

用例5は源氏が明石上に渡す琴が何処からもたらされたものであ
るか、用例6は手紙が何処から来たものかを述べるものである。キ
ヤウは、その「どこ」、つまり、起点を示している。

次に、キヤウに帰着点を表す格助詞へが下接する7例があるが、
『大成』本文中にはミヤコにへが下接する例はなく、異同として1
例を見る。

7 夜さり、京へ遣はしつる大夫(「時方」参りて、右近に会ひ
たり。(浮舟、一八七九⁽¹²⁾)

8 七月二十余日のほどに、またかさねて京へ歸りたまふべき宣
旨下る。(明石、四六八⁽¹¹⁾)

用例7は時方の行先が何処であるか、用例8は源氏が戻るべき場
所が何処かを述べるものである。このように、キヤウは帰着点を示
している。

次に、キヤウにはマデが下接するが、ミヤコには下接例がない。

9 この常不輕(を勤行する法師は)、そのわたりの里々、京ま
でありきけるを、暁の嵐にわびて、…(総角、一六五六⁽⁷⁾)

用例9の副助詞マデは法師の到達点の空間的限度を表しているの
で、格助詞へが下接する用例と類似するものとも言える。

これらの用例では、起点(キヤウ)に対応する到着地点や、帰着
点(キヤウ)に対応する出発点は、話題と内容から判断はし得るも
の、それが文章中には示されていない(このことについては後

に再度触れる)。このことから、助詞ヨリ・へ・マデが下接するキヤウは、起点や帰着点そのものを示すことに重きがおかれており、起点や帰着点が他所のどこでもなく「キヤウ」であること、つまり、キヤウという一つの地点を示すことに主眼があるのではないかと推測されるのである。

五. ミヤコとキヤウの用法の相違

先掲の【表4】からは、助詞ヨリ・へ・マデの下接の有無以外にはミヤコとキヤウに相違が見られない。そこで、次に、ミヤコとキヤウの文中での用法に注目してみる。すると、ミヤコは、「ミヤコ」と「ミヤコ以外の土地」とを対比とらえる場合に用いられる傾向が見られ、キヤウは、「キヤウ」と「キヤウ以外の土地」とを殊更対比することとはせず、第四節で推測したように、キヤウを「キヤウ」という地点としてとらえる場合に用いられる傾向がみられる。

五. 一. ミヤコの用法

ミヤコは、「ミヤコ」と「ミヤコ以外の土地」との二つの場所が明確に意識されており、ミヤコとミヤコ以外の地とを対比的にとらえる文脈中に用いられる傾向がある。

五. 一. 一. 「ミヤコ以外の土地」と対比するミヤコ

ミヤコが用いられる文中では、ミヤコとミヤコ以外の土地とが次の用例10・11のように明示される。あるいは、用例12・13のように内容から明確に把握できる。そして、ミヤコ以外の土地について、

それがミヤコに比べて劣ったものであるとする記述がみられる。

- 10 (明石入道) 「世の中を今とは思ひはてて、(明石の) かかる住まひに沈みそめしかども、末の世に思ひかけぬこといであらなむ、さらに都の住みか求むるを、…」(松風、五八〇⑥)
- 11 (明石尼) 「数ならぬ方にても、ながらへし都を捨ててかしこ(明石)に沈みあしをだに、『世人にたがひたる宿世にもあるかな。』と思ひはべりしかど、…」

〔若菜上、一〇九八⑧〕

用例10・11ではミヤコ以外の土地が「(明石の) かかる住まひ」「かしこ(明石)」として示される。そして、用例10では明石入道の明石での生活は零落した不幸なものとされ、ミヤコでの生活は孫娘の誕生(思ひかけぬこと)により得られる幸福であるとされている。用例11ではミヤコを「数ならぬ方にてもながら(ふ)」ことのできる地とし、明石を「沈みあし」土地であるとする。このように、ミヤコとミヤコ以外の土地は対比され、かつ、ミヤコに比べてミヤコ以外の土地は不遇の地であるとしてとらえられている。

- 12 (源氏が須磨明石で) 藻塩たれつつわびたまひしころほひ、都にも、さまざまにおほし嘆く人多かりしを、さてもわが御身のよりどころあるは、ひとかたの思ひこそ苦しげなりしか、二条の上などものどやかにて、旅の御住みかをもおほつかなからず聞こえ通ひたまひつつ、位を去りたまへる飯の御よそひをも、竹のこの世のうきふしを、時々につけてあつかひきこえたまふに(蓬生、五一九①)

13 まいて、恋しき人によそへられたるもこよなからず、(浮舟が)やうやうものの心知り、都馴れゆくありさまのをかしきも、

こよなく見まざりしたる心地したまふに、：

〔浮舟、一八八八③〕

用例12では、源氏の流離時の生活を「藻塩たれつつわび」たものとするのに対し、ミヤコの人々は生活に困窮はしていないと記される。用例13では、浮舟が田舎育ちであることが前提としてあり、その浮舟が洗練されたミヤコの女性となろうことが記される。用例12・13でもミヤコとミヤコ以外の土地とは対比されており、ミヤコに比べてミヤコ以外の土地は劣るものとしてとらえている。

このように、ミヤコが用いられる文脈では、ミヤコとミヤコ以外の土地の二つの地点が明確に意図された記述となつてゐる。そして、ミヤコをプラス・幸福な・安定した・華やかな―にとらえ（以下、こうしたとらえ方を「上位（にとらえる）」とする）、鄙をマイナス・零落した・悲しく侘しい・洗練されていない―にとらえ（以下、こうしたとらえ方を「下位（にとらえる）」とする）で、ミヤコとミヤコ以外の土地とを対比しているのである。このようなミヤコの用例が29例ある。

次の2例には、ミヤコ以外の土地を下位にとらえる記述は見られるものの、ミヤコのとらえ方についての記述はない。

14（源氏）「横さまの罪にあたりて、思ひかけぬ世界にただよ

ふも、なにの罪にかとおほつかなかく思ひつる。…都離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行ひよりほかのことなくて月日を経るに…」〔明石、四五七⑬〕

15（弘徽殿太后）「世のもときかろがろしきやうなるべし。罪

におちて都を去りし人を、三年をだに過ぐさず許されむことは、世の人もいかが言ひ伝へはべらむ。」〔明石、四六二①〕

用例14では源氏は明石での生活を不遇なものとしてゐるが、この背景には、ミヤコでの暮らしが本来であるという源氏自身の思いがあるものと考えられる。用例15では弘徽殿太后は源氏を追放した側の上位者であり、源氏は追われた側の下位者である。このことから、用例14・15も先の用例10・13と同様に扱うことができると考える。そしてこの2例を加えると、「ミヤコ」と「ミヤコ以外の土地」の二つの地点が文中で明確に意識され、かつ、ミヤコを上位に、ミヤコ以外の土地を下位にという具合に対比的にとらえる用例は31例（散文中の38例中の81.6%）となる。

ところで、次の1例は、ミヤコとミヤコ以外の土地とを対比的にとらえてはいるものの、先の31例とは逆に、ミヤコ以外の土地を上位にとらえていると考えられるものである。

16都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、榎の山辺もわづかに色づきて、（薫はなほ、尋ね来たるに、をかしうめづらしうおほゆるを、：

〔権本、一五五三⑫〕

用例16には宇治に向かう薫が見る風景が描かれており、「をかしうめづらし」とあるように、宇治の音羽山を上位にとらえている。

五、一、二、「ミヤコ以外の土地」と対比しないミヤコ

ただし、次の用例には、ミヤコとミヤコ以外の土地とが示された意識されたりしてはいるものの、その二地点の間に上位―下位の対比的なとらえ方は見出されない。

17（豊後介）「かの国（＝筑紫）を離れたまふとても、多くの願立てまうしたまひき。今、都に歸りて、かくなむ御験を得

てまかりのほりたる、と早く申したまへ。」とて、八幡にまうでさせたてまつる。〈玉鬘、七三〇¹⁴〉

18 (源氏の) 月ごろの御住まひよりは、こよなくあきらかに、なつかしき御しつらひなどえならずして、(明石入道が) 住まひけるさまなど、げに都のやむことなき所々にことならず。

〈明石、四四九¹²〉

用例17では都と「かの国(筑紫)」の二つの地点が明示されるものの、筑紫を出て都に帰ることが示されるのみで、いずれをも上位とも下位ともとらえてはいない。用例18は明石入道の明石の住まいがミヤコの豪奢な邸宅に勝るとも劣らないものである。

このように、ミヤコとミヤコ以外の土地とが明確に意識されているものの、二地点を上位とも下位ともとらえているとは見られない用例が、用例17・18を含めて7例(散文中の38例中の18.4%)ある。

五. 一・三. ミヤコの用法の傾向

以上のように、ミヤコが用いられる文中では、散文中の用例38例のすべてにミヤコとミヤコ以外の土地の二つの地点が意識されている。そして、ミヤコを上位に、ミヤコ以外の土地を下位にとらえる用例が8割を占める。よって、これがミヤコの主たる用法であるということが出来る。また、このことから、ミヤコは、ミヤコとミヤコ以外の土地との二つの地点を意識する中で「ミヤコ」という地点であることを示しているのではないかと考えられる。

第二節で述べたように『源氏物語』の中の、ミヤコに対するミヤコ以外の土地の多くは、須磨・明石・筑紫・宇治であったが、これらを仮に「鄙」であるとすると、ミヤコと鄙とが上位―下位に対比

されているという本稿の考察結果と、ミヤコは「鄙と対」であり、ミヤコは鄙に対して「優位に立つ」とした廣田(一九九〇)の指摘、また、ミヤコはミヤコ以外の地を対比的に示されるとした小町谷(一九八三)・廣田(一九九〇)の指摘は概ね一致すると言いうことができる。

五. 二. キヤウの用法

キヤウは、「キヤウ」と「キヤウ以外の土地」を比較・対比はせず、「キヤウ」という場所を一地点としてとらえる場合に多用される傾向がある。

五. 二. 一. 「キヤウ」という一つの地点を表すキヤウ

第四節で見たように、助詞ヨリ・ヘ・マデが下接する用例はキヤウにのみ見られる。これらの用例では、起点や帰着点(キヤウ)に対応する到着地点や出発点(キヤウ以外の土地)は、話題・内容から判断し得る。ただし、その、キヤウとキヤウ以外の土地との間には、ミヤコとミヤコ以外の土地の間に見られた上位―下位を示す記述が見られない。このことから、格助詞ヨリ・ヘが下接する場合のキヤウは、起点や帰着点が他所のどこでもなく「キヤウ」であること、起点や帰着点そのものを示すことに重きがおかれているものと考えられる。つまり、キヤウは、「キヤウ」という一つの地点を示すことに主眼があるのではないかと考えるのである。

19 (明石上)「(源氏は) 今や京におはし着くらむ。」と思ふ日数も経ず、御使ひあり。このころのほどに迎へむことをぞのたまへる。〈濔標、五〇三¹⁴〉

20 少し御心静まりては、(源氏は)京の御文ども聞こえたまふ。

参れりし使ひは、「…」と泣き沈みて、…(明石、四四九^⑭)

21 「長雨に、築地所々崩れてなむ。」と聞きたまへば、京の家司のもとに仰せつかはして、近き国々の御庄の者などもよほさせて、つかうまつるべきよしのためはす。(須磨、四二〇^⑤)

22 二月二十日あまり、いにし年、(源氏が)京を別れし時、心苦しかりし人々の御ありさまなどいと恋しく、南殿の桜盛りになりぬらむ、一年の花の宴に、院の御気色、内の上のいと清らになまめいて、わが作れる句を誦じたまひしも、思ひ出できこえたまふ。(須磨、四三一^⑪)

用例19の源氏が明石から帰京する場面において、源氏の帰着点はキヤウとして示されるが、出発点(明石)は示されていない。また、想定される出発点(キヤウ以外の土地)と帰着点(キヤウ)との間には、ミヤコとミヤコ以外の土地との間に見られ上位↓下位の対比的なとらえ方が見出されない。用例20↓22も同様である。用例20のキヤウは文の宛先がキヤウであることが表されており、用例21は源氏が指示を与える家司がどこにいる者であるか、用例22は源氏が離れる場所がどこであるかをキヤウが示しているが、キヤウ以外の土地については触れられることは殊更なく、上位↓下位の対比もなされない。このような用例は、第四節に示したキヤウに助詞ヨリ・へ・マデが下接する用例も含めて、キヤウの87例のうち60例(69%)ある。これらのことから、キヤウは「キヤウ」という一つの地点を示すことに主眼があると考えられる。

たしかに、キヤウが現れる文章中に、キヤウ以外の地に関する記述がある用例もある。ただし、その場合も、次の用例23・24のよう

に、キヤウとキヤウ以外の土地との間には上位↓下位の対比的なとらえ方が見出されない場合が多い。

23 (玉鬘乳母)「かかる御さまを、ほととあやしきところ(筑紫)に沈めたてまつりぬべかりしに、あたらしく悲しうて、家かまどをも捨て、男女の頼むべき子どもにもひき別れてなむ、かへりて知らぬ世の心地する京にまうで来し。」と言ふ。(玉鬘、七三九^③)

24 (弁のおもと)「京のことさへ絶えて、その人もかしこ(筑紫)にて亡せはべりにし後、十年あまりにてなむ、あらぬ世の心地して…」(橋姫、一五三九^⑧)

用例23・24は、いずれもキヤウと筑紫(あやしきところ・かしこ)とが現れているが、キヤウとキヤウ以外の土地(筑紫)との間に上位↓下位の対比的な関係は見出されない。このような用例は、キヤウ87例のうち17例ある。

用例18↓22にも、キヤウの背景にはキヤウ以外の土地が想定されるが、殊更にこれを表面化させることはせず、「キヤウ」を一つの地点として示すことに主眼があると考えられる。一方で、キヤウ以外の土地は意識下にはあるため、用例23・24のように、キヤウとキヤウ以外の二つの地点が文章中に現れる場合もあるのではないだろうか。

五. 二. 二. 「キヤウ以外の土地」と対比するキヤウ

ただし、キヤウの用例の中にも、キヤウとキヤウ以外の土地とが文中に見出され、かつ、この二つの地点の間に上位↓下位の対比的なとらえ方をしているものが見られる。次の2例では、キヤウと宇

治とが文中に現れ、キヤウと宇治とは対比的にとらえられている。

25宮(「句宮」は、(宇治に)おはしますことのいと所狭くありがなければ、(句宮)「(中君を)京に渡しきこえむ。」とおぼしたちになり。〈早蕨、一六七九②〉

26四方の山の鏡と見ゆる汀の水、月影にいとおもしろし。(蕨)

「京の家の限りなくと磨くも、えかうはあらぬはや。」とおぼゆ。〈総角、一六六四⑫〉

用例25は句宮が宇治の中君のもとに通うにあたって宇治では都合が悪いため、句宮にとつて都合のよいキヤウに中君を移そうというものであり、キヤウを上位、宇治を下位にとらえているものと思われる。このように、キヤウとキヤウ以外の土地との間に上位―下位の対比的関係を見出せる用例は4例ある。なお、第一節に示した用例1はこの中のひとつである。一方、用例26は、宇治川の自然美には三条の新築の屋敷の美しさをもつても及ばないとし、キヤウよりも宇治優れたものとする。用例26は逆に、キヤウを下位、宇治を上位にとらえている。このように、キヤウとキヤウ以外の土地との間に下位―上位の対比的関係を見出せる用例は6例ある。

しかし、用例25・26のような用例は、キヤウ87例のうちの10例であるから、『源氏物語』のキヤウの用法としては周辺のなものであると言えよう。

五. 二. 三. キヤウの用法の傾向

このように、キヤウが「キヤウ」という一つの地点としてとらえることに主眼があるものと考えることのできる用例が全体の約7割を占めることから、これがキヤウの主たる用法であると考えること

ができる。

五. 三. キヤウとミヤコの用法の相違

以上のことから、ミヤコは「ミヤコ」と「ミヤコ以外の土地」の二つの地点を明確に意識し、同時に、ミヤコを上位に、ミヤコ以外の土地を下位に、という具合に、対比的にとらえる場合に用いられるという傾向が強く認められる。

これに対し、キヤウは「キヤウ」をひとつの地点として示すことに主眼があると考えられる。ただし、キヤウにもキヤウ以外の土地は意識下にはあり、そのため、キヤウとキヤウ以外の二つの地点が文章中に現れる場合もあるのであると考えられる。

六. 写本間の異同

第二節で述べたように、ミヤコとキヤウとの書写上の交代例は少なく、6例であった。⁽²³⁾

この6例のうち、次の用例27・28は、解釈のしかたによつては、二地点を対比しているとも、一地点の提示であるとも見ることができるところである。ここに、キヤウとミヤコの写本間の異同がある。

次の用例27は『大成』がミヤコとするところを、御物・高松宮・ハーバード・穂久邇・陽明の五本がキヤウとする。

27都には、月日過ぐるまに、帝を始めたてまつりて、恋ひきこゆるをりふし多かり。〈須磨、四二六⑫〉

用例27は、この直前までに、須磨での源氏の様子と太宰大貳の上京を伝える消息が須磨の源氏に届くことが記されており、ミヤコの

東宮のことや弘徽殿太后の勢力拡大の話へと話題が転じる。用例27は話題が転じたその冒頭の文である。つまり用例27は、ここで話題が転じたことにより、「キヤウという一地点においては」という具合に視点も転じているとも解釈することが可能な箇所である。

用例28は『大成』がキヤウとするところを、御物・高松宮・ハーバード・尾州の四本がミヤコとする。

28 (明石上の) 母、「…京の人の語を聞けば、(源氏は) やむごとなき御妻ども、いと多く持ちたまひて、…かくも騒がれたまふなる人は、まさに(わが子・明石上のように) かく怪

しき山賊を心にとどめたまひてんや。」(須磨、四三〇②)

用例28は明石入道と北の方が、娘の源氏との婚姻について語るところである。「京の人の語を聞けば」が、源氏の自宅のあるキヤウに住まう人の噂によるとという条件・前置きであり、その中でキヤウはひとつの地点を表しているとも考えられるが、これを、「ミヤコの人の語る大勢の高貴な女性に囲まれた源氏の様子」と「明石にいる身分は低い明石上」という具合にミヤコと明石に上位↓下位の対比的視点があるのとらえることも、解釈上、不可能ではない。

このように、この2例は、二つの地点を対比的に示しているとも、一つの地点を示しているともとらえることが可能な箇所である。このように、解釈にゆれがあるところに、写本間の異同が見られるのである。

ただし、他の4例には、解釈上のゆれはないものと思われる。よって、この4例にある写本間の異同は、後世、次第にミヤコとキヤウの相違が特に意識されなくなっていく結果生じた混同であると考えられる。『大成』本文が「キヤウより」とする用例29aを、穂久

邇本が「ミヤコより」とする用例29bは、その最たる例と考える。第四節で見たように、平安時代の散文資料中ではミヤコには格助詞ヨリが下接する例は皆無に等しいが、用例30・31⁽²⁵⁾のように、中世の散文資料中にはミヤコにヨリが下接する用例が見られるようになることから、そのように考えるのである。

29a 京よりも御迎へに人々参り、ここちよげなるを、…

(明石、四六九⑧)

29b 宮こよりはさりぬへき人おむかへにまいりなんと

(穂久邇本、明石、四三〇)

30 榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目止る心地して、…

(徒然草)

31 「是に都より」ながされたまひし丹波少將殿、法勝寺執行御房、平判官入道殿やおはする。」(平家物語)

まとめ

以上、『源氏物語』のミヤコとキヤウの相違について考察してきた。本稿で述べたことをまとめると次のようになる。

一、『源氏物語』では、ミヤコは、ミヤコとミヤコ以外の土地の二つの地点を対比する場面に用いる傾向がある。

二、『源氏物語』では、キヤウは、キヤウを一つの地点として示すことに用いる傾向がある。

注

(1) 小学館国語辞典編集部編集(二〇〇〇—二〇〇二) 小学館

(2) ミヤコ・キヤウの項目は奥村恒哉執筆担当。

(3) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編（一九八二）角川書店

(4) 小西（二〇一一）では「鄙」をミヤコの「対照語」であるとする。

(5) 『大成』索引篇では奈良のキヤウ・西のキヤウを、キヤウとは区別しているが、本稿ではこれもキヤウの例に含める。なお、『大成』本文には用例がなく、写本に用例が見られる場合もある（キヤウ〈須磨、四二九^⑦〉〈浮舟、一八七七^⑬〉・ミヤコ〈須磨、四三一^③〉〈明石、四六〇^④〉）が、本稿の考察対象には含めない。

(6) 飯島：飯島本（書芸文化院春敬記念書道文庫蔵、『飯島本源氏物語』笠間書院）

池田：池田本（天理図書館蔵、新天理図書館善本叢書『源氏物語池田本』八木書店）

大島：大島本（古代学協会蔵）

御物：御物本（東山御文庫蔵本各筆源氏、『御物 各筆源氏』貴重本刊行会）

貴重本刊行会

榊原：榊原家本（国文学研究資料館蔵、『源氏物語 榊原本』勉誠出版）

三条西（宮内庁）：三条西家本（宮内庁書陵部蔵、原色版青

表紙本『源氏物語』新典社）

三条西（日大）：三条西家本（日本大学蔵、『日本大学蔵

源氏物語』八木書店）

高松宮：高松宮家蔵本（高松宮御蔵河内本源氏物語』臨川書店）

断簡（田中）：源氏物語断簡（田中重太郎編著『源氏物語断簡』

東風社）

伝本（天理）：鎌倉時代中末期書写本（天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集二』八木書店）

伝本（日大）：伝後光厳院筆本・伝藤原為家筆本・伝二条為

氏筆本（日本大学蔵、宿本、『日本大学蔵 源氏物語

鎌倉期諸本集二』八木書店）・伝二条為氏筆本（日本大

学蔵、夕霧、『日本大学蔵 源氏物語 鎌倉期諸本集二』

八木書店）

中山：中山家旧蔵本（国立歴史民俗博物館蔵、『貴重典籍叢書 文学篇十七・十八』（臨川書店）

ハーバード：ハーバード大学蔵本（ハーバード大学美術館

蔵『源氏物語』〈須磨〉・『ハーバード大学美術館蔵『源

氏物語』〈蜻蛉〉新典社）

尾州：尾州家本（蓬左文庫所蔵・尾州家旧蔵、『尾州家河内

本源氏物語』八木書店）

伏見：伏見天皇本（古典文庫）

蓬左：蓬左文庫蔵本（蓬左文庫蔵所蔵鎌倉時代古鈔本、『源

氏物語古本集』貴重本刊行会）

保坂：保坂本（東京国立博物館蔵、『保坂本源氏物語』おう

ふう）

穂久邇：穂久邇文庫蔵本（日本古典文学影印叢刊『源氏物語』

貴重本刊行会）

明融：伝明融等筆本（東海大学附属図書館蔵、東海大学蔵桃園文庫影印叢書『源氏物語』東海大学出版会）

陽明：陽明文庫本（陽明叢書『源氏物語』思文閣出版）

- (7) 伊藤（二〇一三）は御物・高松宮・尾州・穂久邇・陽明は同群の写本であると述べている。【表1】を見ると御物・高松宮・尾州・穂久邇が、仮名書き例が他本より多いことがわかる。このことは伊藤（二〇一三）の見解を裏付けるものとなり得るのではないだろうか。

- (8) 〈玉鬘、七二二④〉には国冬本に異同があり、〈蜻蛉、一九七四⑫〉には大島河内本に異同がある。

- (9) 新編国歌大観編集委員会監修（一九九六）『新編国歌大観CD-ROM版』角川書店

- (10) 「ミヤコのほか」の例が1例ある。この用例では、普段は六条院の外にも滅多に出ない紫上が、源氏とともに摂津の住吉社に来ていることが示されている。よって、平安京（あるいは左京、つまり、ミヤコの外にることとなる。

○対の上（＝紫上）、常の垣根のうちながら、ときどきに付けてこそ、興ある朝夕の遊びに耳ふり目なれたまひけれ、（六条院の）御門より外の物見をさをさしたまはず、ましてかく都のほかのありきはまだならひたまはねば、めづらしくをかしくおぼさる。〈若菜下、一一四〇①〉

- (11) 玉上（一九六五）。

- (12) 注11に同じ。

- (13) 「京のうち」の例があるものの、キヤウの範囲を知ることとはできない。

○（時方）「いと恐ろしく占ひたるもの忌みにより、京のうちをさへ去りてつつしむなり。〈浮舟、一八九三⑭〉

- (14) 「四十寺」がどの寺院を指しているかは不明とされている。

古注釈書にも「貞観十年遣使於辺京四十ヶ寺」（『岷江入楚』卅四）、「貞観十三年遣使於辺京卅ヶ寺」（『河海抄』第十三）などの記述を見るにとどまる。

- (15) 玉上（一九六六）、今泉（一九七五）、石田・清水（一九八〇）、鈴木（二〇〇〇）。

- (16) 阿部・今井・秋山・鈴木（一九九四）。

- (17) 「この近き（都の四十寺）」の解釈については、なお考察を要する。用例4は、内裏にいる秋好中宮が源氏の四十賀のために祈願をしている場面であることから、名詞コが中宮を指すと考え、ここでは「（秋好中宮が源氏のために）かつて内裏のあつた奈良の七大寺の誦経を納め、中宮の近いほうの平安京（あるいは左京）の四十の寺々には絹を納める、」といった意かと考えておく。適否を再考したい。

- (18) 『源氏物語』以外の平安中期頃の用例について、国文学研究資料館電子資料館「日本古典文学大系本文データベース」(<http://base.lit.jac.jp/~nkbtbdtb/>)に拠って調査すると、

ミヤコに格助詞ヨリが下接する用例は、和歌では2例（伊勢物語・宇津保物語に1例ずつ）、散文では「この十五日になん、月の都より、かぐや姫の迎へにまうで来なる。」（『竹取物語』）の1例である。ミヤコに格助詞へが下接する用例は散文中の用例はなく、土左日記の和歌に3例、和泉式部日記の和歌に2例ある。ミヤコに副助詞マデが下接する用例は散文にも韻文にも用例がない。

- (19) 「みやこに」〈蓬生、五二五⑨〉を、高松宮・尾州・七豪源氏

〔『大成』校異篇による〕・飯島・伝本（天理）が「みやこへ」とする。

〔20〕用例19は保坂本に「キヤウへ」との異同がある。

〔21〕用例20は「京への御文」と理解できるが、小田（二〇一五）に拠ると、古代語では「への」という言い方はなかったようだとされる。「への」の意味の「の」が下接する用例はミヤコにもある（明石、四七二〔14〕）が、ミヤコに助詞へが直接する例はない（平安和文でも稀である）ので、ミヤコには助詞へは積極的には下接しないものと考えられる。

〔22〕その場合も、キヤウはキヤウという一つの地点を表し、キヤウ以外の土地はキヤウではない別の一点点というように、個別の地点を表す意図があるのではないか考えるが、推測の域を出ない。今後の課題である。

〔23〕注8参照。

〔24〕注19に記した異同も、ミヤコとキヤウの相違の意識が後世希薄になった結果であろうと思われる。

〔25〕国文学研究資料館電子資料館「日本古典文学大系本文データベース」(<http://basel.nijl.ac.jp/~nkbtddb/>)に拠る。

参考文献

浅川哲也・竹部歩美（二〇一四）『歴史的变化から理解する現代日本語文法』おうふう

阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男編（一九九四）『新編日本古典文学全集 源氏物語 三』小学館

池田亀鑑（一九六〇）『源氏物語事典』東京堂

石田稷二・清水好子（一九八〇）『新潮日本古典集成 源氏物語 五』

（新潮社）

今西祐一郎（一九九四）「みやこ」と「京」―平安京の遠近法―（柳

井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『新日本古典文学大系 源氏物語 二』岩波書店所収）

伊藤鉄也（二〇一三）「海を渡った古写本『源氏物語』―「須磨」の場合―（伊藤鉄也編『ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』「須磨」新典社所収）

今泉忠義（一九七五）『源氏物語 現代語訳 六』桜楓社

小田勝（二〇一五）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院

加藤洋介（二〇〇二）『河内本源氏物語校異集成』風間書房

神尾暢子（一九八九）「源語京師の空間規定―共通素材の類義表現

―」『学大国文』三二

小西甚一（二〇一）『基本古語辞典 新訂版』大修館書店（基本

古語辞典 三訂版）（一九七六年）の二色刷大型版『学習基本

古語辞典』（一九八四）の新訂版）

小町谷照彦（一九八三）「都」『国文学 解釈と教材の研究』二八―

一六

鈴木一雄監修（二〇〇〇）『源氏物語の鑑賞と基礎知識 若菜上（後

半）』至文堂

玉上琢弥（一九六五）『源氏物語評釈 第五卷』角川書店

玉上琢弥（一九六六）『源氏物語評釈 第七卷』角川書店

玉上琢弥編（一九六八）『紫明抄 河海抄』角川書店

中野幸一編（一九九七）『岷江入楚 源氏物語古註釈叢刊第八卷』

武蔵野書院

廣田收（一九九〇）「花の景としての都―須磨・明石巻を中心に―」
 （難波浩編・廣川勝美編集『源氏物語 地名と方法』桜楓社所収）

【表1 ニヤコの表記】

| 大成 | 飯島 | 池田 | 大鳥 | 御物 | 榊原 | 三条西 (宮内府) | 三条西 (日大) | 嵯峨宮 | 断簡 | 佐木 (天理) | 佐木 (日大) | 中山 | ハー バード | 尾州 | 伏見 | 蓬左 | 保坂 | 穂久邇 | 明融 | 陽明 |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|--------------|-------------|-----|----|------------|------------|----|-----------|-----|-----|----|-----|-----|----|-----|
| 若衆、153⑪ | みやこ | 宮古 | 見やこ | 宮こ | — | 宮こ | 見やこ | — | — | — | — | 宮こ | — | みやこ | 三や古 | — | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ |
| 若衆、155② | みやこ | 宮古 | みやこ | 宮こ | — | 三やこ | 宮こ | 三やこ | — | — | — | 宮こ | — | みやこ | 三や古 | — | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ |
| 須磨、395④ | 宮古 | 三や古 | 見やこ | 三やこ | — | 宮こ | 宮古 | 三やこ | — | — | — | — | 三やこ | 三やこ | 三やこ | — | 宮古 | 宮こ | — | 宮こ |
| 須磨、396⑤ | 宮こ | 三やこ | 見やこ | みやこ | — | 宮こ | 三や古 | 三やこ | — | — | — | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ |
| 須磨、410⑥ | 宮こ | 宮こ | 三やこ | みやこ | — | 宮こ | 三やこ | — | — | — | — | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | 三や古 | 宮こ | — | 宮こ |
| 須磨、410⑧ | みやこ | みや古 | 見やこ | みやこ | — | みやこ | 三や古 | 三やこ | — | — | — | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ |
| 須磨、411④ | 宮こ | 宮古 | 見やこ | みやこ | — | 三やこ | 宮古 | 三やこ | — | — | — | — | 三やこ | 三やこ | 三やこ | — | 三や古 | 宮こ | — | 宮こ |
| 須磨、424⑩ | 宮こ | 三や古 | みやこ | 宮こ | — | 宮こ | 都 | 三やこ | — | — | — | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | みやこ | 宮こ | — | 宮こ |
| 須磨、425⑨ | 宮こ | 宮こ | 見やこ | 宮こ | — | 三やこ | 宮こ | 三やこ | — | — | — | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ |
| 須磨、426④ | みやこ | みや古 | 見やこ | みやこ | — | 宮こ | 三や古 | 三やこ | — | — | — | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ |
| 須磨、426⑫ | 宮こ | 宮古 | みやこ | 京 | — | 宮こ | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 三やこ | 三やこ | — | 宮古 | きやう | — | きやう |
| 須磨、433⑬ | みやこ | 三や古 | 見やこ | 宮こ | — | 三やこ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | 三やこ | 三やこ | 三や古 | — | 宮古 | 三やこ | — | 宮こ |
| 須磨、433⑭ | 宮こ | 宮こ | 見やこ | 宮こ | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | 三やこ | 三やこ | 三やこ | — | 三やこ | 宮こ | — | 宮こ |
| 須磨、434⑨ | 宮こ | 宮古 | 見やこ | 三やこ | — | 宮こ | 都 | 三やこ | — | — | — | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | 宮こ | みやこ | — | 宮こ |
| 明石、441③ | 宮こ | 宮古 | 都 | みやこ | — | 宮こ | みやこ | 三やこ | — | — | — | — | — | みやこ | 三やこ | — | 宮古 | 宮古 | — | みや古 |
| 明石、448⑦ | 宮こ | 宮古 | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | みやこ | 三やこ | — | 宮古 | 宮古 | — | 三やこ |
| 明石、449⑨ | 宮こ | 宮古 | 都 | 三やこ | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | 三やこ | 三やこ | — | 宮こ | 宮古 | — | 宮古 |
| 明石、451⑦ | 宮こ | 宮古 | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ | 宮こ | 三やこ | — | — | — | — | — | みやこ | 宮こ | — | みやこ | 宮こ | — | 宮こ |
| 明石、457④ | 宮こ | 宮古 | 宮こ | 三やこ | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | 宮こ | 宮こ | — | 宮古 | 宮こ | — | 宮こ |
| 明石、457⑬ | 三やこ | 宮古 | 都 | 三やこ | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | みやこ | 宮こ | — | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ |
| 明石、462① | 宮こ | 宮古 | 都 | 三やこ | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | 宮こ | 三やこ | — | 宮こ | 宮古 | — | 宮こ |
| 明石、472⑩ | 三やこ | 宮古 | 都 | 三やこ | — | 宮こ | 三やこ | 宮こ | — | — | — | — | — | 宮こ | 三やこ | — | 宮こ | 宮古 | — | 宮古 |
| 明石、474③ | 宮こ | 宮古 | 宮こ | みやこ | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | 三やこ | 宮こ | — | 宮こ | みや古 | — | 宮こ |
| 明石、475⑦ | 宮こ | みやこ | 宮こ | 三やこ | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | みやこ | 宮こ | — | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ |
| 蓬生、519① | 見や古 | 三やこ | 見やこ | みやこ | — | 宮こ | 見屋こ | — | — | — | — | — | — | 三やこ | 三やこ | — | 宮こ | みやこ | — | 宮古 |
| 蓬生、525⑨ | 見や古 | 宮こ | みやこ | 宮こ | — | 宮古 | みやこ | — | — | — | — | — | — | 三やこ | 宮古 | — | 宮こ | みやこ | — | 宮古 |
| 蓬生、537⑬ | 宮古 | 宮こ | みや古 | 宮こ | 三やこ | 宮古 | 三やこ | — | — | 三や古 | — | — | — | 三やこ | 宮古 | — | 宮こ | みやこ | — | 宮古 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|----|-----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| 松風、580⑥ | 三や古 | みや古 | みやこ | 宮こ | — | 都 | 宮こ | 宮こ | — | — | 宮古 | — | — | 宮こ | 宮こ | 宮こ | 宮こ | 宮こ | — |
| 松風、584③ | 宮こ | 宮古 | みやこ | 宮こ | — | みやこ | 三やこ | みやこ | — | — | 宮古 | — | — | 宮こ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 松風、584③ | 宮こ | みや古 | みやこ | 宮こ | — | 都 | 宮こ | 宮古 | — | — | 宮古 | — | — | 宮こ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 玉響、722② | 三やこ | みや古 | みやこ | 三や古 | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | 三やこ | 宮こ | 三やこ | みやこ | 宮こ | — |
| 玉響、723① | 三やこ | みや古 | 宮こ | 宮こ | — | 三やこ | 三やこ | 見やこ | — | — | — | — | — | 三やこ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 玉響、727⑥ | 三やこ | 三や古 | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | みやこ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 玉響、730② | 三やこ | 三や古 | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ | 三やこ | 都 | — | — | — | — | — | みやこ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 玉響、730③ | 三や古 | みや古 | 都 | 宮こ | — | 宮こ | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | 三やこ | 宮こ | 宮こ | ナシ | みやこ | 宮こ |
| 若菜上、1082⑭ | 三やこ | 三や古 | みや古 | 三や古 | — | 都 | 三やこ | 三やこ | — | — | — | — | — | みやこ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 若菜上、1098⑥ | 宮古 | 宮こ | 都 | 宮こ | — | 都 | 宮こ | 宮こ | — | — | — | — | — | 宮こ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 若菜下、1140① | 宮こ | 宮こ | 宮こ | 三やこ | 宮古 | 宮こ | 三やこ | 宮こ | — | — | — | — | — | 宮こ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 夕顔、1311② | 宮こ | 宮こ | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ | 三やこ | — | 宮こ | 三やこ | — | — | 三やこ | 宮こ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 橋姫、1522④ | 都 | 宮こ | 宮こ | 三やこ | — | 宮こ | 三やこ | 宮こ | — | — | — | — | — | みやこ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 橋姫、1529⑩ | 三やこ | 宮こ | 宮こ | 三やこ | — | 宮こ | みやこ | 宮こ | — | — | — | — | — | みやこ | 宮こ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |
| 稚木、1533⑫ | 三やこ | 宮こ | 宮こ | 宮こ | — | み屋古 | 三や古 | 三やこ | — | — | — | — | — | 宮古 | 宮こ | 宮こ | みや古 | 宮こ | — |
| 総角、1658① | 見やこ | 三やこ | 宮こ | 三やこ | — | 見やこ | 三やこ | 三や古 | — | — | — | — | — | 宮こ | 宮古 | 宮こ | ナシ | みや古 | 宮こ |
| 浮舟、1888③ | 三やこ | — | 宮こ | 宮こ | — | 宮こ | 宮こ | ナシ | — | — | — | — | — | 三やこ | 宮こ | 宮こ | 三やこ | 宮こ | — |
| 手習、2005⑨ | 三やこ | 都 | 三やこ | みやこ | 宮こ | 三や古 | 三や古 | 宮こ | — | — | — | 宮こ | — | 三や古 | 三やこ | 宮こ | みやこ | 宮こ | — |

【表2 キヤウの表記】

| 大成 | 飯嶋 | 池田 | 大島 | 御物 | 轉原 | 三条西 (宮内庁) | 三条西 (日大) | 高松宮 | 断簡 (田中) | 伝本 (天理) | 伝本 (日大) | 中山 | ハート | 尾州 | 伏見 | 蓬左 | 保坂 | 徳久邇 | 明謙 | 陽明 |
|---------|----|----|-----|-----|----|--------------|-------------|-----|------------|------------|------------|----|-----|----|----|----|----|-----|----|-----|
| 夕顔、139② | 京 | 京 | 京 | きやう | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | 京 |
| 夕顔、140① | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | きやう |
| 夕顔、144① | 京 | 京 | きやう | きやう | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | きやう |
| 若菜、151⑧ | 京 | 京 | 京 | きやう | — | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | 京 |
| 若菜、152③ | 京 | 京 | 京 | きやう | — | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | 京 |
| 若菜、154② | 京 | 京 | 京 | きやう | — | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | 京 |
| 若菜、160③ | 京 | 京 | 京 | きやう | — | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | 京 |
| 若菜、173⑦ | 京 | 京 | 京 | きやう | — | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | 京 |
| 若菜、176⑨ | 京 | 京 | 京 | きやう | — | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | ナシ |
| 若菜、180⑩ | 京 | 京 | 京 | きやう | — | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | ナシ |
| 須磨、414⑩ | 京 | 京 | 京 | 京 | — | きやう | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | きやう | — | きやう |
| 須磨、414⑨ | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | ナシ |
| 須磨、415⑦ | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | 京 |
| 須磨、420⑤ | 京 | 京 | 京 | きやう | — | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — | きやう |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|----|-----|---|---|-----|---|---|---|---|-----|---|---|---|---|---|----|-----|----|-----|---|---|---|
| 須磨、430② | 京 | 京 | 京 | 京 | 宮こ | — | 京 | 京 | 京 | 三やこ | — | — | — | — | — | 宮こ | 三やこ | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 須磨、431① | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 明石、441⑦ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 明石、442① | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 明石、442④ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 明石、449⑩ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 明石、452③ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | ナシ | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 明石、460④ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | ナシ | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 明石、460⑫ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 明石、468① | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | ナシ | — | 京 | 京 | — |
| 明石、468⑧ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | ナシ | — | 京 | 京 | — |
| 明石、469⑧ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 宮こ | 京 | 京 | — |
| 明石、471① | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 澤郷、487⑩ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | きやう | 京 | 京 | — |
| 澤郷、490⑤ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | きやう | 京 | 京 | — |
| 澤郷、503⑨ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — |
| 蓬生、522① | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | ナシ | 京 | 京 | — |
| 関屋、547⑤ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | きやう | 京 | 京 | — |
| 関屋、547⑦ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | きやう | 京 | 京 | — |
| 松風、592⑤ | ナシ | きやう | 京 | 京 | ナシ | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | 京 | — | 京 | ナシ | 京 | 京 | 京 | — |
| 玉巻、719⑩ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 玉巻、720⑩ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 玉巻、722① | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 玉巻、722④ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | きやう | 京 | 京 | — |
| 玉巻、723⑦ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 玉巻、723⑥ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 玉巻、724⑩ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 玉巻、729③ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 玉巻、747⑬ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 玉巻、748② | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 若菜上、1082⑩ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 若菜上、1088⑤ | 京 | 京 | 京 | 京 | きやう | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 若菜上、1093⑬ | 京 | 京 | 京 | 京 | きやう | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 若菜上、1097④ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |
| 橋姫、1514⑩ | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | — | 京 | 京 | 京 | 京 | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | — | 京 | 京 | — |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|---|--|---|---|---|-----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 橋姫, 1524③ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | ナシ | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 橋姫, 1539⑧ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | ナシ | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 総角, 1598① | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 総角, 1630⑤ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 総角, 1632⑥ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 総角, 1634⑦ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 総角, 1656⑦ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 総角, 1658① | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 総角, 1663④ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 総角, 1664⑫ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 総角, 1668⑬ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 早瀬, 1679② | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 宿木, 1760① | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 宿木, 1762③ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 宿木, 1763⑨ | 京 | | 京 | — | 京 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 東屋, 1842③ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 東屋, 1849⑬ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1865⑬ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1868⑨ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1870⑨ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1874④ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1874⑧ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1879⑫ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1890⑦ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1893⑬ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1897⑩ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1919⑬ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 浮舟, 1924② | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 蜻蛉, 1931② | 京 | | 京 | — | 京 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 蜻蛉, 1939⑥ | 京 | | 京 | — | 京 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 蜻蛉, 1941⑦ | 京 | | 京 | — | 京 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 蜻蛉, 1957⑪ | 京 | | 京 | — | 京 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 蜻蛉, 1960⑦ | 京 | | 京 | — | 京 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 蜻蛉, 1974⑫ | 京 | | 京 | — | 京 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 手習, 1998⑧ | 京 | | 京 | — | 京 | きやう | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-----|--|---|---|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 手習、2006② | きやう | | 京 | 京 | きやう | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 夢浮橋、2055⑨ | 京 | | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |
| 夢浮橋、2057⑩ | 京 | | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 | 京 |

付記

本稿は平成二八年度科学研究費補助金学術研究助成基金助成金（基盤研究C）による研究課題「『源氏物語』写本との比較から見た国宝『源氏物語絵巻』詞書の日本語学的研究」（課題番号16K02731）の研究成果の一部である。

（たけべ・あゆみ 静岡県立大学）